

新渡戸稲造と女性の修養

——婦人雑誌を中心として——

森 上 優 子*

NITOBE Inazo and Moral Cultivation for Women :

Focus on Women's Magazines

MORIKAMI Yuko

abstract

This paper tries to elucidate the effect of Nitobe's Christianity on his concept of moral cultivation, through a research on his articles in well-known women's magazines in modern Japan, *Fujin sekai* and *Fujin gahoo*. 72 of his articles are identified in *Fujin sekai* from 1910 to 1931, and 75 ones in *Fujin gahoo* from 1907 to 1930. Most of them are published from Taisyo period to early Showa period, when the working women population had increased, as well as the variety of occupation had expanded.

His suggestion conflicted with these social phenomenon. It is confirmed from his articles that Nitobe argued women should be at home. He believed that women's power is the source of the domestic happiness, which must be a basis of the state. He described women's power as the spirit of self-sacrifice. Showing this spirit means living with God based on his Christianity, he described it "vertical". He said, human being should recognize the Inner Light inherent in individual heart. Women can establish spiritual independence, when she lives with God.

Key words : Inner Light, cultivation, women's magazine, Quakers

はじめに

ミッション・スクールを中心としたキリスト教徒による学校教育活動は、女子教育を中心に展開した。ミッション・スクールは、1873（明治6）年のキリシタン禁制高札撤去や欧化主義を追い風に、明治前半期にその設立が集中している。ミッション・スクールが女子教育に貢献したことは、女性に就学の門を開いたことや、宗教教育を通して、一夫一婦制、神の前の平等、隣人愛、奉仕の精神、女性の人格の尊重という、キリスト教倫理観を提示した点にある。

本稿でとりあげる新渡戸稲造（1862-1933）は、近代日本を代表する女子教育者として活躍したキリスト者のひとりである。彼の女子教育への関心は、1884（明治17）年にアメリカに留学した時にすでにその萌芽を見出すことができる。それは、彼と内村鑑三（1861-1930）が1885（明治18）年にフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道教会（Women's Foreign Missionary Association of Friends of Philadelphia）⁽¹⁾の会合に出席し、フレンド派

キーワード：内なる光、修養、婦人雑誌、クエーカー派

*平成14年度生 国際日本学専攻

に対して日本伝道への進言を行っている点である。

このように女子教育に関心を持った新渡戸は、後に積極的に学校教育活動を行う。例えば、遠友夜学校の設立、東京女子大学初代学長の就任、女子経済専門学校長の就任などである。彼の学校教育活動における女子教育思想の断片は、青山なを、河合道、上代たのなどの追憶から伺い知ることができる。そこには女性への「同情者」⁽²⁾として人格教育に尽力した新渡戸像が浮かびあがる。しかしながら、実際の学校教育の現場における彼の言説は、資料として残されているものが数少ない。

そこで本稿では、学校教育の対象者を読者層に持つ当時の有力な婦人雑誌、『婦人世界』、『婦人画報』に掲載された彼の女性向けの修養言説を、彼の具体的な女子教育思想を表す資料と位置づけ、彼のクェーカー派を通じたキリスト教信仰との関連から考察する。その場合、修養言説が主体性の確立にその目標をおく言説という前提に立ち、主体性の確立の観点から、彼の修養言説の内実を明らかにしたい。

1. 修養への関心とその時代

新渡戸の女性向けの修養言説を考察する前に、彼の修養への関心について確認しておきたい。

新渡戸の著作の中でも、通俗的な人生論、処世訓に関する著作は大きな割合を占めるものであった。⁽³⁾その代表的な著作としては、『修養』(1911 [明治 44]、『全集』第 7 巻所収)、『世渡りの道』(1912 [大正 1]、『全集』第 8 巻所収)、『自警』(1916 [大正 5]、『全集』第 7 巻所収)、更に女性向けの修養書、『婦人に勧めて』(1917 [大正 6]、『全集』第 11 巻所収)、『一人の女』(1919 [大正 8]、『全集』第 11 巻所収)がある。これらの著作の刊行年は 1910 年代に集中しているが、新渡戸は、それ以前から『実業之日本』、『婦人世界』、『婦人画報』などの雑誌にも多数の言説を掲載している。この前後の時期は周知のように、修養に関する関心が高まった時期である。例えば、松村介石(1859-1939)が『修養録』(1899 [明治 32])や『修養談』(1902 [明治 35])を、加藤咄堂(1870-1949)が『修養論』(1909 [明治 42])を刊行する。このように出版界において修養関連の著作が賑わっていたその一方で、修養団体の活動も活発化していた。蓮沼門三(1882-1980)は 1903(明治 36)年に修養団を設立し、西田天香(1872-1968)は 1905(明治 38)年に一燈園を設立している。このような修養主義の隆盛の背景には、「煩悶青年」の存在がある。筒井清忠氏は、明治後期を「立身出世主義に陰りが見え始めた時期」であり、「アノミ的状況」であったと指摘する。⁽⁴⁾以上は男性を中心とする関心であったが、同時期に女性もやはり「煩悶」状態に置かれていた。

女性にとっては当時、男性における立身出世主義という人生の指針となるものに、良妻賢母思想が存在した。この良妻賢母思想は、1899(明治 32)年の高等女学校令の制定により、近代日本における女子教育の指導理念として徹底化が図られた。しかし、明治 30 年代後半になると、木下尚江、堺利彦らの社会主義者から「婦人問題」が提出され、1911(明治 44)年には、「新しい女」として平塚らいてう(1886-1971)が『青鞥』を発刊し、社会に衝撃を与えた。その思想的背景には、エレン・ケイなどの欧米における女性解放思想の影響を見出すことができる。このように、明治後期は、女性解放という新しい女性の生き方を模索する動きが起こってきた時期であり、女性は、精神的主体性の確立を迫る新しい規範と旧来の良妻賢母思想との板挟みのなか、精神的支柱に揺らぎが生じ、「煩悶」状態にあったことは想像に難しくなく、当時の婦人雑誌にも「煩悶」、「悶え」という単語が散見される所以でもある。また、「煩悶」の具体的な内容の手掛かりを与えてくれる資料のひとつとして「身の上相談」が読売新聞に登場するのが、1914(大正 3)年 5 月になる。⁽⁵⁾ここでは、主に、恋愛、結婚、家庭生活の問題が読者から提出されていることがわかる。

このような状況の下、女性向けの修養書も続々刊行される。下田歌子が『女子の修養』(1906 [明治 39])を、鳩山春子が『婦人の修養』(1910 [明治 43])を、そして田中久編『結婚前後の修養』が「女流名家の修養講話」を一冊にまとめたものとして 1916(大正 5)年に刊行された。新渡戸の『婦人に勧めて』(1917 [大正 6] 東京社)と『一人の女』(1919 [大正 8] 実業之日本社)もこの潮流に位置づけることができる。

2. 婦人雑誌と新渡戸稲造

新渡戸は、『婦人に勧めて』、『一人の女』を刊行するが、これら二冊の修養書の関係については、神谷美恵子

氏が『婦人に勧めて』を新渡戸の女性論の総論と見なし、『一人の女』を各論としてのケーススタディであると指摘している。⁽⁶⁾『婦人に勧めて』に収録された言説は雑誌『婦人画報』に掲載された言説から、『一人の女』のそれは雑誌『婦人世界』に掲載された言説から取捨選択したものである。

ここで、婦人雑誌に関する特徴について若干の説明を加えておきたい。第一に、読者層についてであるが、永嶺重敏氏は職業婦人、女学生、都市新中産家庭の主婦が中心であり、大正後期以降は下層の特に若い女性層へ波及したと分析する。⁽⁷⁾この読者層は、新渡戸が関わった学校教育の対象者を内包し、更にその裾野に広がりをもつものであった。雑誌『実業之日本』に青年向けの修養言説を展開した新渡戸の想定する読者層が、「地方」在住者や労働者⁽⁸⁾であったのと大きく相違する点でもある。第二に、婦人雑誌がどの程度受け入れられていたのかという問題である。『婦人世界』は実業之日本社より1906（明治39）年1月に創刊され、その年度の総刷部数は、23万6500部であったという。⁽⁹⁾大正前期まで『婦人世界』の発行部数は婦人雑誌のなかで一位（20-30万部）であったが、大正中期以降、そのシェアは徐々に減り、代わって大正期創刊の雑誌である『婦人倶楽部』、『婦人公論』、『主婦之友』が上位を占めるようになり、遂に1933（昭和8）年に『婦人世界』は廃刊を迎える。⁽¹⁰⁾また、1905（明治38）年7月に創刊した日本初のグラフ誌『婦人画報』は、『婦人世界』の陰りが見えた昭和初期、1927（昭和2）年に約3万、1931（昭和6）年に7-8万と発行部数を着実に伸ばしており、固定読者をしっかり掴んでいった。⁽¹¹⁾

新渡戸は、雑誌というメディアを活用し、学校教育の対象者をはるかに越える対象に向けて修養言説を発信した。『婦人世界』には、1910（明治43）年9月の第5巻10号から1931（昭和6）年6月の第26巻9号まで、延べ72号に記事を掲載し、『婦人画報』には、1907（明治40）年4月の第3年4号から1930（昭和5）年8月の301号まで延べ75号に掲載した。掲載は、国際連盟事務局次長時代の1919（大正8）年5月から1925（大正14）年1月までを除き、大正期から昭和初期に集中している。

3. 新渡戸稲造の女性向けの修養言説

(1) 理想的女性像 — 「婦人の力」 —

新渡戸は、理想的な女性のあり方を、家庭に生きることと捉えている。1915（大正4）年刊行の『人生雑感』の「婦人の力」で、そのことが端的に示されている。

婦人の力の最も強烈に働くのは家庭である、家庭は、単に男に対する女と云ふ、純粹の人格としてよりは、寧ろ家庭に於ける或る特殊な位置に於て、例へば良人とか、両親とか、子供とかに対して、妻として、嫁として、母としての女の力の最も強烈に働く処である。力は相手がなければ用をなさない。

勿論女と雖も国家に対しても、社会に対しても、又団体に対しても義務を持っている、けれども女にとって最も大切な義務は家庭に対するものである。⁽¹²⁾

これは、「婦人の解放」、「女子の参政権運動」を批判する箇所での彼の言説である。さらに時代は下り、1928（昭和3）年の『婦人世界』の「嫁ぐ娘におくる言葉（1）」では、新渡戸は女性の経済的独立の傾向を認めつつも「益々独身婦人を増すであろう」⁽¹³⁾と懸念を示し、女性は「適當の年齢に達すれば結婚生活に入るのが、天命を全うする所以」⁽¹⁴⁾と述べる。そして彼は、結婚を「民族の發展」という理解に立ち重要視する。

当時、第一次世界大戦による産業化の進展、第三次産業の拡大により女性の職種が拡大した。そのため女性の職業進出も増大したが、この時期の新渡戸の言説は、女性の職業進出を積極的に支持するものではないことがわかる。新渡戸は、経済的独立や自己実現という観点から社会進出による女性の男性化を図るというより、「民族の發展」という国家的見地から、女性も国民の一員として、男性の相補的存在に対し価値を見出し、結婚して家庭を治めるのに不可欠な存在と捉えているのである。新渡戸は『婦人画報』の「縁談雑話」で、国家と家庭との関係を「国家の基礎は家庭にあるのであるから、報国の道は即ち家庭の円満、夫婦の相和、親子兄弟の相親に発する」⁽¹⁵⁾とし、国家の基礎となる家庭の安寧を主張する。新渡戸の国家観の特徴とは、法治国家ではなく「倫理的団体」⁽¹⁶⁾と捉える点にあり、社会支配において法よりも人倫的側面を強調した。彼にとって、家庭における人倫関係の拡大が国家として捉えられていたのである。

さて、当時の良妻賢母思想は、従来のそれと比較して女性の職業進出を肯定している点にその特徴を見出すことができ、先述の『結婚前後の修養』にもこの傾向を認めることができる。小山静子氏によれば、その要因は、

明治末期からの「婦人問題」やヨーロッパ女性が第一次世界大戦の銃後の活動に従事し、積極的に社会進出を果たしたことによる男性の代替としての高い評価にあるとする。そして日本における良妻賢母思想も、女性を妻母の役割にのみ従事させておくのではなく、あくまで家庭内での役割を第一義としながらも、職業進出が期待されるようになったと指摘する。⁽¹⁷⁾

新渡戸は、そのような潮流のなかにあり、性別役割分業を肯定する理想的女性像を提示した。女性の家庭における働きについて、新渡戸は、『人生雑感』の「婦人の力」で、次のように理解する。

女の力は受身の力である、目だたぬ力である、隠れたる力である、そしてそれを養ふのは各自の精神修養で、結局は、あらゆるものを、自分自らを天の命ずるまゝに神に献ぐることである。⁽¹⁸⁾

「受身の力」は、1916（大正5）年の『婦人世界』の「婦人の力」でも言及されている。そこではその内容が「ものに堪へ忍ぶことと、他人のために己を捨てるといふ高尚な犠牲の精神」⁽¹⁹⁾と示されており、それが上に述べる「神に献ぐる」意であったのである。新渡戸は、「犠牲の精神」を、「人生は犠牲の一生であつて、犠牲なくて人生は渡れぬ」⁽²⁰⁾、また「人生のあらゆる問題の解決は犠牲より外にない」⁽²¹⁾といい、人間の生において不可欠な精神として重要視する。

新渡戸の女性に対する同様の見解は、すでに1899（明治32）年に刊行された *Bushido, The Soul of Japan*（和訳名『武士道』）の第14章「婦人の教育及び地位」のなかでも、封建時代の女性に関して言及する箇所で見出すことができる。

○娘としては父の為に、妻としては夫の為に、母としては子の為に、女子は己を犠牲にした。かくして幼少の時から彼女は自己否定を教へられた。彼女の一生は独立の生涯ではなく、従属的奉仕の生涯であった。男子の助者として、彼女の存在が役立てば夫と共に舞台の上に立ち、若し夫の働きの邪魔になれば彼女は幕の後に退く。⁽²²⁾

○女子がその夫、家庭並に家族の為に身を棄つるは、男子が主君と国との為に身を棄つると同様に、喜んで且つ立派に為された。自己否定一之なくしては何等人生の謎は解決せられない—は男子の忠義に於けると同様、女子の家庭性の基調であつた。⁽²³⁾

また後年、1932（昭和7）年のアメリカにおける講演記録『日本文化の講義』の第12章「日本の家庭生活」でも、次のように述べている。

女性は自らを放棄することで、自分を最高に役立たせ、自分自身を救うのである。これが家庭の理想を、いやが上にも強くしたものである。そして、これが母親としてわが国民の生活の中で、隠れた、しかし、強力な原動力にしたものである。⁽²⁴⁾

以上にみられる女性の「犠牲の精神」や「自己否定」のあり方は、封建時代における武士の妻の生き方として理解されるとともに、婦人雑誌を中心とする理想的女性像も、その延長線上に位置づけられるものであり、明治から昭和期を通じた新渡戸の女性観に一貫する精神であったと考えられる。

(2) 「修養」概念と「犠牲の精神」

次に、新渡戸の「修養」概念と「犠牲の精神」との関連について考察してみよう。

彼は、『一人の女』の「何事にも慌てぬ婦人」で、「修養」概念を次のように規定している。この記載部分は『婦人世界』に掲載された記事の収録部分ではなく、『一人の女』のために加筆された部分であるが、ここで、新渡戸は、人間にはそれぞれ「天性」（「生れながらの心」）が生まれる前から備わっていると記す。「天性」、すなわち「天賦の性質の利用法は、各自の意志に依つてどうにでもなる」⁽²⁵⁾とし、「私どもの意志一つで善用することもできれば悪用することもできる。この善用する心掛を「修養」」⁽²⁶⁾であると述べている。

また、「修養」概念については、『修養』の「総説」で「修身」と「養心」の意とし、「修身」は、「自己が其意志の力により、自己の一身を支配すること」、「克己なることが本となつて、肉体情慾の為に心を乱さぬ様、心が主となつて身体の動作又は志の向く所を定め、整然として、順序正しく、方角を誤らぬ様、拳動の紊れぬ様、進み行く意」であり、「養心」は「各自の預つて居る、柔和な、少しく荒く扱へば、息の根も耐え易い、その代り、懇切に養へば最も能く馴づく仔羊の如き心に食物を与へ、寒い時には温みを与へ、暑い時には之を涼しうし、横道に踏み迷はんとする時は、之を呼び止めて、正道に反らし、有らゆる方法を用ゐて正道に従ひ養育するの意」

と規定する。⁽²⁷⁾

新渡戸の「修養」概念とは、「天性」の「善用」であり、「心」を「正道に従ひ養育」し、その「心が主」となって「克己」することによる自己支配がその内実であった。

更に、新渡戸は「克己」を「犠牲」と同義のものとして理解しており、「克己の最上」を「善事の為に、己の一身を犠牲に供するといふ様に、己を捨てる義」⁽²⁸⁾しているところから、新渡戸の「修養」概念とは、「克己」、「犠牲」による自己支配とも言え換えられよう。

さて、『一人の女』の「犠牲的精神を發揮せる婦人」で、新渡戸は「献身」と共に「犠牲」の定義を行っている。

世には、「犠牲」とか「献身」とかいふ、何人も尊重するものがある。犠牲とは文字通り、罪を購ふためにか、または感謝を述ぶるためにか、自分の愛するものを割いて捧げることをいふのである。献身とは、自分の信ずるものに自分の身を納め奉つて、二心なきことを現す動作である。この二つは己れの利害を度外に置いて、神のためか、人のためか、または主義のために、自己を棄てることである。⁽²⁹⁾

この「自己を棄てること」とは、「身の利益を去つても心の清浄を求むること」⁽³⁰⁾にはかならなかつた。「犠牲」、「献身」によって人間は「心の清浄」を獲得することができるのであり、それは「天命」に従うことによって可能となるものであった。人間が「天命」に従ったとき、「如何なる艱難に逢つても」「少しも取乱さない態度」⁽³¹⁾をとることができ、「心は境遇に超然たるべきもの」⁽³²⁾となるのである。これが「修養」の結果来るべきあり方なのであるが、この不動ともいふべき「心」の強さの根幹には、自己と神との関係、すなわち、新渡戸のいう「ヴァーチカル」⁽³³⁾な関係に生きるという確固たる内面的信仰が存在したのである。

『修養』には、最上の「犠牲」の例として耶蘇が挙げられている。

世界の歴史、英雄の伝記中にもこの犠牲といふことが現はれて居る。(中略) 苟くも大功を世に遂げた人は総て己を捨て、居る。君主の為に己を捨てた臣もある。貞操の為に己を捨てた婦人もある。父の為に己を捨てた子もある。国家の為屍を戦場に暴した勇士もある。義の為め主義の為に己を捨てたものもある。斯く何か自分よりも偉大なるもの、為に、一生を擲つことは是れ歴史の活ける所である。(中略) 道徳の歴史の中で最も人の目に立つものは、ゴルゴタの山上で耶蘇が磔刑に処せられたことであろう。是は犠牲の最も大なるものである。己の生命を棄て、始めて大なる命を得、小我を捨て、始めて大我を得るのである。⁽³⁴⁾

「犠牲」とは、「自己を捨てること」による「大なる命」、「大我」を獲得することであり、それは、超越である神と出会うことによる「心の清浄」を意味したのである。

新渡戸は、「煩悶」する女性に対して、女性の「天性」である「犠牲の精神」を十分に發揮することにより、「心の清浄」を獲得すること、別言すれば、「我は我なりと云ふ観念を以つて、我对天の操を守」⁽³⁵⁾するという、自己と神との関係に生きる内面的信仰を確立することにより、精神的自律、主体性の確立を試みたと考えられる。

この「犠牲」の重視は、彼の学校教育の現場においても示される。新渡戸が1918(大正7)年に東京女子大学初代学長に就任しその礎を築いたが、彼はその徽章を「犠牲」(Sacrifice)と「奉仕」(Service)の頭文字であるSSを十字に組んだデザインに決めている。⁽³⁶⁾その徽章に込められた新渡戸の思いの内実こそ、上に考察してきた彼の修養言説に具体的に記されていたのである。

4. 報国の道 — 「ホリゾンタル」な関係 —

新渡戸の「修養」概念の内実をみると、精神的自律、主体性の確立を枢軸に位置づけており、根底に儒教的倫理観とは異なる、彼が信仰したキリスト教という「宗教」との関連が指摘できよう。これは彼の「修養」概念のひとつの特徴を表すものである。

『婦人画報』や『婦人世界』において、「宗教」、「信仰」という言葉が散見され、新渡戸は、「煩悶」する女性に対して、「宗教」、「信仰」の必要性を語り、その観点から、「幸福」について述べる。『婦人世界』の「婦人の真の幸福とは何か」のなかで、新渡戸は、「幸福」(「ハツピネス」Happiness)を「物質上の満足」とし、「真の幸福」である「プレツセドネス」(Blessedness)(「祝福」と区別する。新渡戸は、人間の獲得すべき「幸福」として後者を主張し、それへの到達に必要とされたものを「宗教」と理解する。⁽³⁷⁾

「真の幸福」である「祝福」とは、女性が、つまり人間の側から日々「犠牲の精神」を發揮して、超越なる神

の側から「大なる命」、「大我」を獲得することにより生じる「幸福」にはかならなかった。人間は「真の幸福」を獲得したときに、初めて「煩悶」は消滅し、精神的平安の状態に達することができるのである。それは、「不幸な運命を自分の使命だと観ずるやうな一種の宗教的見地にまで来て、初めてゆるやかな温かみが出て来る」⁽³⁸⁾であるとか、「不運な境遇に立つと初めて、万人を愛する温かい情が溢れてきたことを思ふと、この境遇も一面からは幸福な天命」⁽³⁹⁾とあるように、人間が自己と神との関係に生き、精神的自律を得たとき、逆境は「煩悶」の対象ではなくなり、「使命」として身に引き受けるべきものと肯定的に捉え直され、「煩悶」という自己に向けられた関心が、他者に対する「温かい情」、同情心の生起へと方向転換がはかられるという状態を指したのである。このような「煩悶」の解決法は、儒教的倫理思想からは到底導くことはできない。新渡戸のいう「ヴァーチカル」な関係を基盤とした「ホリゾンタル」⁽⁴⁰⁾な関係の成立が、「真の幸福」の具現であり、「報国の道」であった。そしてそれは家庭の安寧を通じて、「倫理的団体」である国家の構築へとつながるものであったのである。

新渡戸はクエーカー（Quakers）派を通じてキリスト教を信仰したが、クエーカー派の中心的教義は、「基督の種子」であるところの「内なる光」（Inner Light）という自己にあらざるものが、万人の心のなかに平等に宿る点にある。そしてこの「内なる光」の平等性を尊重することから博愛の精神が生まれ、世界平和が目指された。このクエーカー派の視点に立つとき、新渡戸のいう「真の幸福」である他者に対する同情心の生起とは、他者にも平等に内在する「内なる光」の発見と言い換えることができるであろう。

新渡戸は、人間の生において「ヴァーチカル」な関係に基づく「ホリゾンタル」な関係の構築を目指した。彼は、「他人を見たら盗賊と思へ」という言葉を、当時の日本社会を端的に表す言葉として頻繁に使用し、対人関係の基盤には「猜疑の眼」が存在するという。そのため「親密」な交際は成立せず、「形式的」、「表面的」な交際に終始すると懸念を表している。⁽⁴¹⁾このような対人関係に関しては、女性向けのみならず、青年向けの修養書にも見出され、新渡戸の深く憂慮する点であったと考えられる。新渡戸は日本人の人間関係の閉鎖性、孤立性を問題視して、女性に向けて理想的な交際のあり方を説く。

殊に日本の婦人は、人に接するに愉快的な心持を欠いてゐるやうに思ひます。之では相手方に不快な感じを与へますから、将来人に接すること益々多くなる時に際して、かゝる習慣は打破してつて、つとめて気持ちよく心を愉快に持つて人に接することが肝要であります。⁽⁴²⁾

資本主義や戦争による人類の対立など、希薄な人間関係に危惧の念を抱いた新渡戸は、人間に平等に宿る「内なる光」の発見を通して、人間各自の心の外壁を取り崩し、開放的且つ親密な他者との人間関係を基盤とする社会構築を願ったのではなからうか。それこそクエーカー教徒新渡戸の目指す世界平和であったのである。

おわりに

本稿では、『婦人世界』、『婦人画報』を中心に掲載された新渡戸の女性向けの修養言説を彼の具体的女子教育思想の表れと捉え、その内実を主体性の確立という観点から明らかにしてきた。その結果、新渡戸は、性別役割分業を支持し、女性が生きる場を家庭と理解していることがわかった。その思想的背景には、「犠牲の精神」を発揮することにより「ヴァーチカル」な関係において主体性を確立し、それが「温かい情」へと転化され、他者のなかの「内なる光」の発見という「ホリゾンタル」な関係を成立させて生きるという女性観が存在した。そしてそれが女性にとっての「真の幸福」であり、また「報国の道」でもあったのである。このように、新渡戸は、クエーカー派を通じたキリスト教倫理に基づく国家の構築の根本に、女性の内面的信仰の必要性を説いたのである。

新渡戸は男女を互いに尊重されるべき相補的存在と理解した。彼は青年向けの修養書のなかで、男性に対して「其天賦の才を発揮すれば、其が国家社会に尽す所以」⁽⁴³⁾とし、本人に職業選択を任せつつも、「願はくは技術を修め、以て国の殖産興業に資」すことを希望している。⁽⁴⁴⁾それに対して、女性には立身出世の世界である男性の領域への参入を歓迎しない。むしろ、その世界から閉ざすことによって、戦争などから生じる人間間の不和、男性の領域である立身出世という競争社会における個人主義を否定し、人間に平等に宿る「内なる光」の発見、人間ならざる聖なるものの発見によって、人間が互いに尊重されるべき社会の実現を目指したのではなからうか。

近代国家が、家庭を再生産領域とし女性の持つ母性を称揚して彼女たちを国民化していく過程で良妻賢母を国

策としたが、そのなかにあつて新渡戸の修養言説は、「信仰」を基軸とする人倫の平和的關係に基づく国家を目指した点に、その特徴を見出すことができよう。そして平和国家の建設は日本の国際化への方途でもあつた。新渡戸が後年説くように「国際心は愛国心を拡大したもの」⁽⁴⁵⁾であり、「愛国心」とは「憂国心」(Matriotism)を意味し、「好戦的愛国心」(Chauvinism)と対置する心性と捉えられた。⁽⁴⁶⁾従つて、日本国民は臣民としてだけでなく、国際的視野に立ち世界平和の責務を負うべきものと位置づけられたのである。

さて、女性の生きる場を家庭と規定したキリスト者は新渡戸だけではなかつた。札幌農学校で同級であつた内村鑑三もそのひとりである。彼はクリスチャン・ホームの日本における実現を主張する。⁽⁴⁷⁾クリスチャン・ホームとは、世俗的社会で生きる男性に代わり、女性がクリスチャンの純粹性を保ち、夫を善導し、子供に感化を与える役割を果たし、それが社会浄化につながるという家庭観である。⁽⁴⁸⁾これをみると、新渡戸の修養言説もそれと共通の基盤を有すると考えられる。しかし、『婦人世界』、『婦人画報』の読者層がキリスト教信徒だけでなく一般の女性にも開かれていたこともあり、新渡戸が女性に向けて「宗教」の必要性を説くとき、「神とか佛とかいふ人間以外の或る偉大なるものの力を認め」⁽⁴⁹⁾ることを勧めるにとどまり、キリスト教への言及を避けている。この寛容とも言うべき信仰理解は、新渡戸の特徴のひとつである。新渡戸のクエーカー派を通じたキリスト教信仰の根底には「クエーカー派においてのみ私はキリスト教と東洋思想を和解させ、調和させることが出来た」⁽⁵⁰⁾と述懐するように、「内なる光」により、東西における宗教間の共通性として「神秘性」を見出し、それを人間の生の根拠としたことである。⁽⁵¹⁾一般の女性に対して新渡戸が修養を説くとき、キリスト教に敢えて言及しなかつたのは、上に示したごとく、他宗教を許容する彼の宗教観が反映してのことであると考えられよう。

以上、本稿では新渡戸の女性観ならびに家庭観を中心に論じてきたが、その根底にある国家観については詳細に言及することができなかつた。それについては別稿を期したい。

註

※本稿における新渡戸稲造の著作からの引用は、『新渡戸稲造全集』教文館 1969-2001による。

- (1) 1882 (明治 15) 年に結成され、他国の恵まれない女性に対して、愛の心と手をさしのべることを義務とした。
- (2) 『一人の女』『全集』第 11 巻 p.224
- (3) 小林善彦氏は、新渡戸の著作を三系列に分類している。第一に、『農業本論』、『西洋の事情と思想』など、欧米諸国の文化を日本に紹介した著作、第二に、*Bushido, The Soul of Japan* に代表される日本の文化を海外に紹介する意図の英文の著作、第三に、『修養』、『婦人に勧めて』などの通俗的な人生論、処世訓に関する著作とする。「新渡戸稲造」『講座 比較文学』5 巻 東京大学出版会 1973 pp.233-249
- (4) 筒井清忠「近代日本の教養主義と修養主義 —その成立過程の考察—」『思想』812 1992
- (5) 早川紀代『近代天皇制国家とジェンダー』青木書店 1998 p.223
- (6) 解説『全集』第 11 巻 p.456
- (7) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部 1997 pp.181-182
- (8) 『修養』『全集』第 7 巻 p.690、『実業之日本』の読者層は「商店の店員や下級会社員」であつたとされる。E.H. キンモンス著 広田照幸ほか訳『立身出世の社会史 —サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部 1995 p.154
- (9) 営業と広告を担当した栗原七蔵の「営業報告書」による。実業之日本社社史編纂委員会編『実業之日本社百年史』実業之日本社 1997 p.34
- (10) 同上 pp.184-185
- (11) 永嶺、前掲書 p.184
- (12) 『人生雑感』『全集』第 10 巻 pp.126-127
- (13) 「嫁ぐ娘におくる言葉 (1)」『婦人世界』第 23 巻 12 号 1928 p.34
- (14) 同上 p.35
- (15) 「縁談雑話」『婦人画報』128 号 1916 p.9
- (16) 『日本人の特質と外来の影響』『全集』第 18 巻 p.475

この著作は、新渡戸が国際連盟事務局次長としてジュネーブに滞在中 (1920 [大正 9] -1925 [大正 14])、ヨーロッパでの日本紹介の公演記録を基としたものである。

- (17) 小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房 1993 pp.93-197
- (18) 「婦人の力」『人生雑感』『全集』第10巻 p.133
- (19) 「婦人の力」『婦人世界』第11巻14号 1916 p.9
- (20) 同上 p.9
- (21) 「婦人の力」『人生雑感』『全集』第10巻 p.133
- (22) 『武士道』『全集』第1巻 p.112
- (23) 同上 pp.112-113
- (24) 『日本文化の講義』『全集』第19巻 p.228
- (25) 『一人の女』『全集』第11巻 p.235
- (26) 同上 p.236
- (27) 『修養』『全集』第7巻 pp.21-23
- (28) 『自警』『全集』第7巻 p.528
- (29) 『一人の女』『全集』第11巻 p.318
- (30) 同上 p.318
- (31) 同上 p.331
- (32) 同上 p.333
- (33) 『修養』『全集』第7巻 pp.57-58
- (34) 同上 p.140
- (35) 「良妻賢母の新意義」『婦人画報』52号 1911 p.7
- (36) 東京女子大学五十年史編纂委員会編『東京女子大学五十年史』研文社 1698 p.54
- (37) 「婦人の真の幸福とは何か」『婦人世界』第12巻12号 1917 p.6
- (38) 「煩悶しつつある婦人に」『婦人画報』109号 1915 p.2
- (39) 同上 p.4
- (40) 『修養』『全集』第7巻 p.57
- (41) 「心の籠った交際」『婦人画報』129号 1916 pp.2-3
- (42) 「気持ちよく人に接せよ」『婦人画報』90号 1914 p.11
- (43) 『修養』『全集』第7巻 p.76
- (44) 同上 p.72
- (45) 「愛国心と国際心」(1930.6.7)『編集余録』『全集』第20巻 p.56
- (46) 『日本文化の講義』第19章日本人の国民的特徴『全集』第19巻 pp.346-351
- (47) 「クリスチャン・ホーム」『女学雑誌』125.126.127号 1888
- (48) 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』東京大学出版会 1992 pp.28-29
- (49) 「良人の放蕩を歎く婦人に」『婦人世界』第10巻6号 1915 p.7
- (50) 「日本人のクエーカー観」『日本文化の講義』『全集』第9巻 p.360
- (51) 拙稿「新渡戸稲造における道徳観念 — 「人間に東西の区別はない」をてがかりとして —」『道徳と教育』no.322・323 (2005) を参照。

(2005年12月1日受理)